

あいだ

185

発行＝『あいだ』の会

月刊 2011年7月20日発行 1部360円



栃木県大田原市 photo. Akiba Sari

あいだ185号 目次

《講演採録》(芦屋市立美術館「『具体』入門講座」から) <具体> —それは<私の大学>だった
今井祝雄 ……2

イ・ユニョプ版画展「ここに人がいる」(佐喜眞美術館) —イ・ユニョプの「飯」と「器」 洪成潭 ……17

「現場」へ／「現場」から イ・ユニョプ版画展「ここに人がいる」(佐喜眞美術館)を企画して 稲葉真以 ……24

対談<帝国>の時代のアートとアーティスト(後) 白川昌生×小田マサノリ ……27

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第83回 相互浸透する北米アジア研究の現状と、閉塞する日本研究人文学の凋落と
—第70回北米アジア研究学会ホノルル大会・傍聴記(その4：最終回) 稲賀 繁美 ……30

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第83回

相互浸透する北米アジア研究の現状と、閉塞する日本研究人文学の凋落と——第70回北米アジア研究学会ホノルル大会・傍聴記(その4：最終回)

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

【第4日・最終日 4月3日(日曜日)】

Session 613: Virtualization, Visualization, and Literature in Post-postwar Japan (Room 319B 8:00AM-10:00AM)

「戦後-後日本における仮想現実化、視覚化と文学」はSeiji Lippit組織のセッションだったが、これも文学の他の分野との浸透圧を計測する企画だろう。組織者が事情により欠席のため、代役はAtsuko Sakaki 榎敦子。

まずKoichi Haga 芳賀浩一が震災地からの報告で口火を切る。幾多の悲惨かつ非人間的な次元の映像が報道されているが、そこに何かが決定的欠けているとすれば、それは被災現場の耐え難い臭気、夥しい死骸の腐敗臭を含んだ大気の異様さだという。以下、この発言を起点とした席上での当方の発言を再録するに留めたい。

大江健三郎と村上春樹を軸にすえた芳賀の土俵設定には、国内文壇とは無縁の外向き「日本文学」の姿が浮かび上がる。前世紀の80年代が、すでに歴史の風景となり、特有の香りを発散するにいたった様子には、nostalgiaを禁じえない。村上の『ノルウェイの森』(1987)の「森」が誤訳なのは有名な話だ。ビートルズの原盤にはwoodとあったが、「材木」ではサマにならないので、日本では「森」woodsと改変された。以下

は筆者がかつてムラカミの英訳者ジェイ・ルービンと交わした冗談だが、材木woodなら家具の木材の香りが漂うが、森woodsとなると、清潔な自然環境の北欧イメージに洗脳された日本では、無臭となる。この脱臭処理にハルキの小説の舞台設定・時代操作も探られる。背景に流れる音楽や漂う香りに、作家は細心の配慮を込めているが、そうした「環境」は、それを経験したことのない読者からは、自動的に脱落する。「材木」から「森」へのシフトは、60年代の政治性の忌避とともに(原作の冒頭は、1969年のハンプルク空港で話者が耳にしたNorwegian Woodだった)、作家にとっての本来の「主題」が、純愛物語とは別の水準にあったことを暗示し、なおかつそれが後世や外国の(とりわけ韓国や中国の若い)読者からは容易に蒸散し、霧散しがちな儂い「音色」や「臭覚」であることも仄めかす。そのうえで、芳賀も指摘するように、この作品には珈琲を嗜む場面がやたらに登場する。27回を数えるcoffeeのアロマは何を意味するのか。

喫茶店の香りがわれわれを南米へと誘う。同時代をブラジルで過ごして思想形成をなしたげたのは今福龍太だが、クレオール主義を唱え、写真撮影の効能にも敏感な今福は、エーゲ海に滞在した池澤夏樹とも並行して、近年『群島論』archipelagoを唱え、奄美大島に活動の一拠点を移動させている。

ふたり目の論者Franz K. Prichardは奄美を舞台とした写真家、中平卓馬の『都市陥穽』『解体列島』から『奄美』への、中心と周縁、表裏を覆す位相転換を問題とし、内地人と沖縄人を対比し、谷川雁や島尾敏雄のヤボネシアに言及した。ここには今福の先行者であり、80年代の大江の知恵袋でもあった山口昌男の問題意識も透視されるが、となればその今福が提唱する島嶼性を、ヘゲモニ一的理論への拒絶の姿勢、中平の写真行為を分析する際の反=理論として援用する可能性もあるのではないか。

Atsuko Sakakiは金井美恵子の『タマヤ』（単行本1987）を題材に、シャシンへと転載する映像の懐胎に「身体的複製としての写真」を読む。構の高度に洗練され鋭敏な分析には逐一立ち入らないが、一方で中平論にも登場したEugène Atgetへの金井の関心は、同時代に『物語批判序説』（単行本1990；『海』への第一部掲載1982、第二部掲載1984）を執筆した蓮實重彦と金井との「関係」を想起させざるをえない。というのもこの時期このふたりは、互いのゲラに相手が朱を入れるという倒錯的な行為を演じていたからだ。現

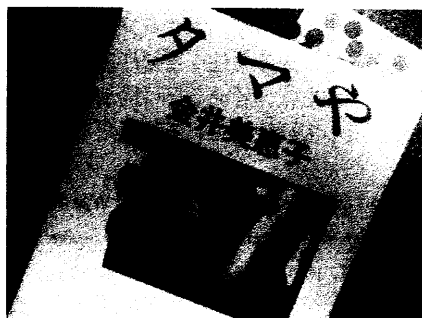


図2 金井美恵子 『タマヤ』（初版1987年）

実の銀板への一枚限りの転写でしかないダゲレオタイプと、ネガという左右逆転した虚構により新たな現実を複数に増幅する母胎を供給するカロタイプとのあいだに蓮實は認識論的断絶を見るが、蓮実と金井が中毒症状を起こしているシネマトグラフが後者の末裔であることは言を俟たない。とすれば、『タマヤ』の隠されたネガ、あるいは虚焦点として、あの膨大なる『凡庸な芸術家の肖像』（1988）が召還されねばなるまい。暗室で写真の現像に勤しむ登場人物には、山田宏一という私小説的な水準でのモデルのほかにも、複製写真術の凡庸化=社会普及に手を貸した詩人、マクシム・デュカン影も付きまとうからだ。

この相互映発の写像の合わせ鏡のなかでは、もはや金井と蓮實のどちらがどちらのネガかポジか、どちらが原版originalでどちらが写しcopyなのかを問うことも無意味だろう。蓮實文体の声帯模写に、アラン・ログ=プリエ流の映画の禁じ手への意図的叛逆、さらにAnanda Andersonという架空の映画作家の捏造というIlya Kavakov流の趣向まで盛り込み、活動写真を模倣する所作のうちにイメージの肉体的懐胎を目論む金井の、実験的映画あるいは映画の実験。それは異様なまでに豊穣なる映画の記憶を宿しているだけに、榊敦子の分析に無尽蔵ともみえる水源を供給する。あるいはそれは、後世の学術的探求を誘発する仕掛けを胎内に謎のように胚胎させることによって、作品としての余生あるいは生き残りを確実

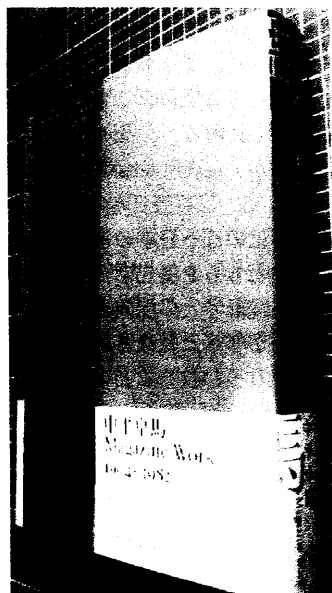


図1 中平卓馬『都市 風景 図鑑』（2011年刊）

ならしめようとした、20世紀末期の文化爛熟期の日本の或る女性作家の深慮遠謀の畀に、理想的な犠牲者あるいは同調者ないし共犯者として取り込まれる戦慄だろうか。

**Session 656: War Literature and War Memory in Shaping Japanese Culture (Room 318B
10:15AM-12:15PM)**

経済的好況に支えられた80年代は、いまにしてみれば金井や蓮實のような贅沢な思考実験を許す能天気な時代だった。だがバブル崩壊とともに、世相は陰惨さを増してきた。「戦争文学、戦争記憶がつくる日本文化」はLevy Hideoと同級生だったというTheodore F. Cookの司会。導入としてM. G. Shefallが加藤典洋『敗戦後論』(1995)と、それが招いた高橋哲哉との論争を皮切りに、敗戦後日本の心的記憶の帰趨を要約した。

「神州不滅」の観念に浸された三世代にわたる価値観は、軍事的破局によって一挙に、しかも包括的に非正統化されたが、敗戦体験の外傷はほどなく朝鮮戦争特需からはじまる経済復興によって隠蔽されてきた。だがバブル経済崩壊後の長引く不況が、20年にわたる超越的価値の不在という心理的空隙を露呈させた。拝聴しながら去来したのは、昨年物故した梅棹忠夫(1920-2010)が敗戦直後に、これから日本は空前の繁栄を迎えると予言して「旭日昇天教の教祖」と周囲から擲論された出来事だった。東北大地震の被害を生きて眼にしたならば、梅棹はいま、いかなる感想を漏らしていたところだろうか。政治史の次元とは別に心性史として日本近代史をどのように時代区分すべきなのか。そしてそこに、世代を異にする人々の体験をいかに結び付けるべきか。

Haruko Taya Cookは、反戦川柳によって獄中死を遂げた鶴彬(1908-1938)の風刺を分析、というよりは丹念に翻訳朗読した。「万歳と挙げていった手を大陸に置いてきた」には、加藤と高橋の論争の矮小さを抽出するだけの実感がこもっている。

Emiko Takeuchi竹内栄美子は堀田善衛(1918-1998)の『時間』(1955)に焦点を当て、

戦争の被害者がまた加害者でもあった両面性を指摘した。2008年に刊行された『堀田善衛 上海日記』などは援用されなかったが、上海で宣撫工作に従事して中国側とも接触をもつうちに日本敗戦を体験した堀田への掘り下げが望まれる。今回のAASで触れた話題に限っても、日本の無条件降伏を武田泰淳とともに知った堀田は、虹口の収容所で、南京から引き上げてきた名取機関の名取洋之助とも関係をもつかわら、国民党政府の中央宣伝部対日文化工作委員会に徴用されている。

Sachiyo Taniguchi谷口幸代は、大場みな子(1930-2007)の三部作『ふなくい虫』(1969)、『浦島荘』(1973)、『王女の涙』(1987)を扱ったが、本来ならば「原爆文学—体験と記憶の変容」とでも題して、ひとつの独立したセッションが必要なことを痛感させられた。峠三吉から阿川弘之、井伏鱒二などのいわゆる原爆文学の系列とは別に、丸山真男、衛藤瀋吉、平山郁夫など、原爆体験を出発点あるいは道標として戦後に発言した幾多の人々の姿、そして彼らの言葉を引用して外国で人々に語りかけたときの光景が、ふいに記憶の底から噴出してきたからだ。福永武彦の『死の島』(1971)が、フォークナーの(世評では)「失敗作」とされる『響きと怒り』(1929)を下敷きに原爆の記憶を綴っていることも思い起こされる。

そうした記憶の変容を、生死を跨ぐ次元で取り上げたのがNanyan Guo郭南燕の長部日出男(1934-)論。三百万日本の「英霊」の慰霊と、二千万にのぼる日本の軍事侵略の犠牲者の弔いのどちらを優先すべきかの議論を、倫理学と統計学との混同として退ける郭南燕は、通俗作家と見なされて文学研究で真面目に取り扱われることの少ない長部が、若い読者を想定した『見知らぬ戦場』(1986)と、自伝的色彩を帯びた『戦場で死んだ兄をたずねて』(1988)とを題材にして、侵略者と被害者とが死を共有する戦場跡に考察を巡らす。召集されフィリピンで戦死した兄の霊を津軽は恐山のイタコに呼び出してもらった体験は、憑霊の真偽を超えて、生

者が死者と対話を交わすことの意味を問い直させる。

時間超過となるので発言は慎んだが、クリント・イーストウッドが『硫黄島』二部作(2006)を撮った件を持ち出すこともできただろう。合衆国の映画監督は、一方で星条旗を立てた勇者たちの戦後の悲惨な末路を描いたが、これは森村泰昌が換骨奪胎して再演し、2010年より、歴史を生きることを問う作品をA Requiem; Art on Top of the Battlefield(2010-11)として巡回している。その裏側には日本側の玉砕が描かれるが、映画では栗林中将との会話の場面に寸時現れたにすぎない登場人物に、予科練の生みの親だった、市丸利之助中将有る。硫黄島の地下壕で、死に臨んで市丸指令が米国大統領フランクリン・ローズベルトに書簡を認め、ハワイ出身の二世日本人兵士によって用意されたその翻訳 A Note to Rooseveltは、戦場の日本人参謀の死体から発見され、米国でいち早く報道され話題を呼んだ。その経緯は平川祐弘が『米国大統領への手紙』(新潮社、1996)で紙碑に纏め、本書は英訳刊行に値する書籍に推薦された。にもかかわらず翻訳計画は、日本側関係者の「配慮」から頓挫した。記憶を共有しようとする企ては、戦後半世紀を過ぎて、なおさまざまな政治的思惑から果たされずに流産してゆき、いまやその最後の生き証人たちも、生涯を終えようとしている。昨日(4月2日)の午後、真珠湾のアリゾナ記念碑付属展示場を参観した。出口近くに



図3 戦艦アリゾナとアリゾナ・メモリアル

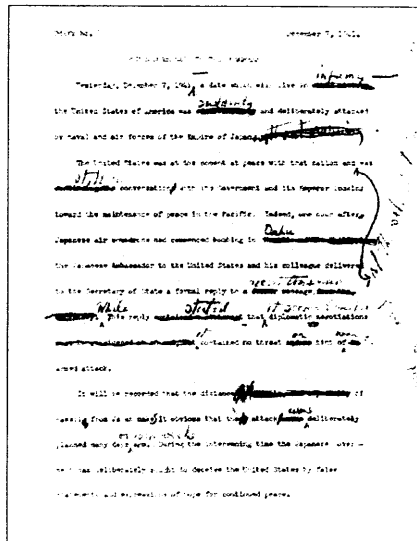


図4 F. Roosevelt, Proposed Messages to the Congress 本文最初の行末で、world historyが抹消され infamyと手書きで訂正されている。

は、日本側の「奇襲」を受け、ローズベルト大統領が議会で12月7日におこなった演説草稿の複写が展示されていた。事務局作成のタイプ印刷に、大統領自身が、震える鉛筆で、書きなぐりの斧正を加えている。冒頭の著名な「今日の日付は汚辱として生き残るだろう」の「汚辱」infamyも、平凡な表現live in world historyを抹消してlive in infamyと書き換えられた語彙だった。仔細に検討すると、全編にわたる電光石火の推敲の威力が納得されてくる。簡潔な裁断と、直裁な詩的語彙の挿入が、ふやけたタイプ元原稿を、別の生き物に変貌させている。この推敲が、米国国民を奮起させ、一致団結して戦争へと向かわせる表現を約束したのだ。日米開戦の記憶は、この大統領演説の音声、語彙と表現によって北米合州国国民の記憶に刻まれている。

Session 676: Textbook Dialogue in East Asia: The Experiences and Lessons of the History to Open the Future Project (Room 318 A 12:30PM-2:30PM)

米国民にとっての戦争の記憶は、アジア

にとっては侵略の記憶である。そしてその記憶の共有という困難あるいは不可能な課題を集約するのが、教科書問題といってよい。この件についても複数のセッションが互いに独立して設けられていたが、時間割の都合で「東アジアにおける教科書対話：『未来をひらく歴史』企画の経験と教訓」にだけ、遅刻して参上した。遅刻の原因は、同時並行のSession 695 (Room 301A) に出席したがゆえ。インドにおける民衆の女神信仰というので情報収集に聴きにいったのだが、低水準の発表に辟易して中座した。教科書問題のほうも出席者はいたって閑散としており、北米の多くの日本・アジア研究者が、この極度に政治化した話題に低い関心しか抱いていないことが推定できた。

発表者の多くは、「日中韓三国共通歴史教材委員会」の編集になり、英訳も待たれるHistory to Open the Future『未来をひらく歴史』への参加者とのこと。「東アジア三国の近現代史」を「日中韓共同編集」で編纂するこの企画は、2001年の「新しい歴史教科書をつくる会」(上に述べた平川祐弘氏もこの段階では名簿に名を連ねている)による教科書の採択を拒否するための運動として開始され、2005年に東アジア三国共同での教科書を刊行した。日本側の代表には大日方純夫、笠原十九司、俵義文各氏の名前がみえる。地震のため欠席したNorihiro Yoshidaの報告要約が伝えるように、2006年の教育基本法の改正にともない学習指導要領が改定されたのに合わせ、2011年には2冊の改訂版を用意しているという。本件については論者も北米、北欧それに韓国で現地の研究者をまえに何度か意見を開陳し、英文の論文を公表している。ここに短く要約するには問題があまりに複雑だが、討論者のSamuel Yamashitaの発言を補足しつつ、さらに踏み込んで要点を述べてみたい。

まず教科書をいかに編集するかと、歴史をいかに教室で教えるかは別問題である。ましこひでのりも別途述べたように、「つくる会」の『新しい教科書』が反面教師としては最良の教育的効果を発揮する可能性も

否定できない。つぎに国定であれ国訂であれ、教科書とは、正しいとされる知識を選別し、それを国民と認定した集団に注入する道具である。とすれば、国是という前提を否定する教科書が特定の国家権限によって承認されることを目指す運動には、定義として倒錯がある。国民国家の枠を超え、国家の枠を解体しようとする歴史認識は、もとより関与する政府の公式見解とは相容れない性質を含んでいるからである。さらに東アジア三国の「国民」という単位を前提としつつ、そこに国民を越えた「共通」の歴史認識をもたらそうとする企画は、実際には「国民」という枠組みを否定する運動を内部に懐胎している。はたしてそれは、かつての「超国家主義」による「五族協和」の理念と、いかに異質なのだろうか。

こうした原理的な矛盾を乗り越える言説は、越境・浸透という政治的な効果を準備する。となれば、公権力が認定しようとはしない認識をこそ「歴史の真実」と呼ぶ反権力志向の権力性も見えてくる。(いうまでもなく、「反権力」の「権力性」ならば「善」であるとか、反対にその「権力性」ゆえに「反権力」をも罪悪視しようといった議論には、評者は加担しない。) ここで認識論的議論に戻るなら、真実そのものはDing an sich同様、表象不可能であり、表象された真実とは真実の屍骸、抜け殻に過ぎない。現場の視聴覚記録ですら、真実の断片痕跡でしかなく、断片を取捨選択する行為には、名取洋之助の言を俟つまでもなく、すでに編集という恣意性が否応なく介入する。事実すべてを教科書に盛り込むのは無理な以上、七三一部隊や南京虐殺が歴史事実であることと、それを教科書に記載すべきか否かは、別次元に属する問題であり、記載基準の選択が優れて政治的な限り、歴史記述に最終的審級はありえない。

Session 748: War, Memory, and Japanese National Identity Construction over Time and Space (Room 319A 2:45PM-4:45PM)

公権力が国民の記憶をいかに制御しよう

としても、民衆の想像力はそれに服することはない。戦争とその記憶は現代日本人の国民的自己意識構築の時空にいかに関わっているのだろうか。Akiko Hashimoto橋本明子が社会学者として卓抜な類型学を示した。戦争体験をもつ生存者が減少するにつれ、戦争記憶は文化記憶へと置換されてゆく。日本では敗北から平和国家の建設へという図式が描かれたが、東西ドイツでは分断から再統一という物語が支配的だろう。この枠組みのなかに英雄、犠牲者、加害者という三類型を配置してみよう。吉田満の『戦艦大和ノ最期』(1952)では、国家の新生のための自己犠牲という英雄像が、死を納得するための論理となった。犠牲者像は中沢啓治『はだしのゲン』(雑誌連載開始1973)の描く、被爆地に死に逝く家族像に典型を見る。正義がなされない虚しさが苦しみへの共感を招く。野坂昭如の『火垂るの墓』(1967)は国家の犠牲に社会疎外を重ねるが、私見によれば、駆逐艦艦長の遺族が餓死を遂げるという設定は、旧海軍の官僚組織への作者の嫌悪を暴露しており、焼け跡世代特有の、過度の被害者意識と思ひ込みには、史実に照らしていささかかならず無理があるだろう。加害者像を引き受けたアイコンとして、論者は家永三郎を取り上げる。家永教科書裁判は法廷闘争として最長の記録をもつが、そこでは国家の犯罪認定の要求が国家権力から拒絶された。こうした類型化は可能だが、以上の例からも分かるように、実際には日本国民は同時に犠牲者でもあれば加害者でもあり、その限りで英雄的な行為を引き受ける立場にもあった。座標軸を設定したうえで、個別例の描く軌跡を歴史的な変数との相関で分析する必要があるだろう。

Mikyong Kimは広島原爆ドームの世界遺産登録を話題に、広島精神とでもいうべき修辞法を解剖した。いわく、被爆地広島の暗い過去は反核平和主義という強力な象徴へと脱皮する。植民地征服の犯罪性や大量殺戮、人類滅亡の潜在的可能性は、道徳性擁護の主張へと変身を遂げる。その政治

的動員力の結実した成果がユネスコによる認定であり、ヒロシマの犠牲者意識は、道徳的な優位を保障する誇りを準備した。恥辱と自負とを兼備した記念碑として原爆ドームは世界遺産として名乗りをあげ、廃墟の栄光を自らに許したのだ、と。

論者として一言補うならば、ヒロシマの犠牲者意識は、加害者糾弾とは距離を置いた。ドーム足元の慰霊碑には「やすらかに眠ってください。過ちはくりかえしませぬから」とある。過ちevilとは加害・被害の別を越えて、生き残った人類全体が犠牲となった人々に誓う祈りの言葉であるとするのが、碑文を起草した雑賀忠義教授の立場だった。だがインドのバル判事は、日本人が「過ち」を悔いるのは筋違いとする見解を表明したし、また近年にはこの「過ち」の部分が毀損される事件も発生している。「過ち」を認める自虐史観への反発の高まりが、その背後にはあったのであろう。さらにスミソニアン博物館での原爆被害の展示が中止に追い込まれた頃には、広島原爆資料館を訪れた米国人参観者が、米国を犯罪人扱いしているとして、原爆被害展示に批判を加えるといった事態も発生した。原爆投下が終戦を早め、戦争犠牲者の数を減らすのに貢献したとする、米国側の公式見解が明示されてはなくなったことが、かかる感情的反発を招いた原因だろう。だがこの義憤の背後には、原爆投下が人道にもとる悪行だったとは認めたくない、心理的葛藤が姿を覗かせてもいる。

震災ゆえ欠席したKazuya Fukuokaの48頁に達する論文は割愛するが、かつての侵略者としての罪障感と、その裏返しとしてアジア諸国民の尊厳への配慮とのあいだで、敗戦後日本は国家としても個人としても、この両者にいかに折り合いをつけるか迷ったまま迷走した。内に鬱屈した日本人としての自負と、愛国心の表明を自らに禁ずる自己抑制とのあいだで、「当たり前な国家」を忌避しつつ渴望する、観念複合の躁鬱症を昂進させてきた。そうした病理的に確な輪郭を与えたのが、敗戦後の戦艦大和伝説

だったといってよいだろう。

Shunichi Takekawa竹川俊一は、松本零士原作（とはいえテレビ連載では典型的に『西遊記』の続き物の趣向で編集された）『宇宙戦艦ヤマト』（1974-5; 1977）から、冷戦末期に新たな国際秩序を提唱した川口かいじ『沈黙の艦隊』（1988-96）の原子力潜水艦「やまと」、さらには、中途半端な大予算で、キャメロン監督の『タイタニック』（1997）を下手に流用しつつ捏造した、評者にはひどい凡作としか思えない角川映画の『男たちの大和』（2005）に至る、「敗者の美学」と「負け犬精神」の変奏を辿った。敗戦後の日本人が世代交替を越えて反復してきた判官贔屓の詳細を、ここで竹川論文に沿って復習するには及ぶまい。

またKaori Yoshidaは竹川論文の後を受けて、実写版『宇宙戦艦ヤマト』（2010）における女性登場人物の変貌ぶりに注目した。高度経済成長期のアニメでは紋切り型の家庭的な献身の自己犠牲を厭わなかった看護婦兼任の森雪が、今回は『キル・ビル』（2003-04）の主人公顔負けの能動的な女戦士に変身して生還する。だがこれは銀河鉄道999』に通底する松本零士の女性思慕が、40年の歳月を経て、現代のジェンダー志向と決定的に乖離した証にほかなるまい。会場投影図版には戦艦大和ではなく、竣工時の重巡洋艦・最上の姿が間違っ繰り返し図示されたが、これは、まあご愛嬌。

そのうえで以下、論者としての議論若干を許されたい。これら一連の作品の原点となった『戦艦大和ノ最後』は、小林秀雄の推薦を受けながらも、占領下で検閲にあい出版が遅れたが、その検閲記録をワシントン滞在中に検証した江藤淳が「右

翼」となって帰国したのは有名な逸話である。白洲大尉の訓戒として記載された「日本の新生二先駆ケテ死ヌ」覚悟は、近年、真偽論争の渦中にある。だがそれは、戦争犯罪により死刑を求刑された二千名を越える日本人たちの多くが、処刑に先立つ遺書のなかで表明した自己理解に重なり合う。日本の再生のための自己犠牲となることを、自らに納得させる遺言が大多数を占めたことは、鶴見和子がコロンビア大学に提出した社会学の博士論文で、『世紀の遺書』（1953）を資料として分析したとおり。これとは対照的に、真珠湾の戦争記念博物館は、時代遅れの旧式戦艦アリゾナの沈没という恥辱から始まり、日本の無条件降伏調印式の会場となった戦艦ミズーリの栄光へという筋運びによって、第二次世界大戦における「勝者の物語」を提供して見せる。

討論者に指名されたManfred N. M. Henningsenは、日本の若手によるメディア・大衆文化研究への違和感をかすかに表明しつつ、アイヒマン裁判と日本の戦争責任論との対比を論じた。果たしてホロコーストと南京大虐殺とは対比できるのか、という神学的問いであり、また両者の落差にたいする倫理的不審でもある。さらに戦艦大和の悲惨な片道特攻という自殺行為（実際には

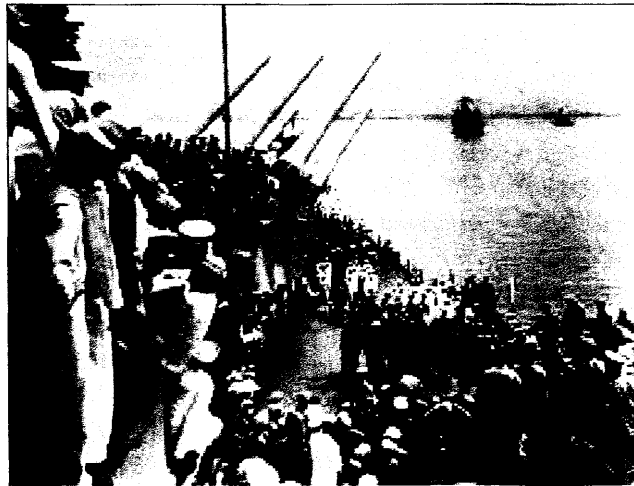


図5 ミズーリ艦上における降伏調印 1945年9月2日

復路分の重油もかき集められて提供された、との不確かな説もあるが)に感情移入し、そこに自己を投影して精神浄化のcatharsisを得ているらしい日本人の精神構造の固着ぶりに対する危惧も表明された。聴衆の数はもはや疎らだったものの、ここから活発な質疑応答となり、閉会のあとも熱心な討議が継続された。だがそれを詳述する余裕はない。

ただひとつ、ハワイという土地柄であろうか、米国籍の日本人二世の愛国心についても質問があったので、そのことをだけ、最後に備忘録に書き付けておきたい。戦艦大和が目指して行き着けなかった沖縄、ようやく戦列に加わった戦艦ミズーリがその巨砲を遠慮なく撃ち込んだ沖縄で、日本側に投降を求めた米軍の日本人二世兵士は、彼の帰属意識を糾う日本兵に対して、『平家物語』の平忠盛を引いて、こう訴えたのだという。「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」と。「反戦映画『男たちの大和』を見た若い世代からは、「なぜ国のために自分を犠牲にしなくてはならないの?」との質問が聞かれたという。国家への忠誠と家族への孝行とが両立しない状況ゆえの苦しみは、あるいはもはや脱『敗戦後論』世代の日本人には理解を超えた心情なのかもしれない。だが、時代遅れを覚悟しつつ、この矛盾に今回のAASを要約する問題意識を見定めたい。

倫理とは、相容れない規律や矛盾する命令が交差し重複する複合領域において、無理を承知で指針を模索する姿勢を指す言葉であり、そこには必ず私的な領分と、それを越える公的な次元とが錯綜してくる。ここで公的とは、官尊民卑の「官」の意味ではなく、「私」が個としての自己では責任を取れない過去に遡及する何者かでもあって、それは場合によって祖先や死者の霊の姿を帯びる。そこには裏返しに、現在が将来に対してとるべき責任も透視される。越境といい、浸透といい、口にするのは容易だろう。だがそれは異質な掟の支配する時空を

跨ぐ、という意味での侵犯transgressionと裏腹な行為であり、であればこそ、現世的な道德律を越えた倫理的な判断と、死者への責任、未来への選択をも含まざるを得ない。

戦艦アリゾナのように、水没したまま英霊の慰霊碑となることもなく、また戦艦ミズーリのように改装されて博物館となる幸運にも恵まれず、多くの乗員を道連れに海の藻屑と消えた戦艦・大和。その伝説がリメイク物の再生を促す限り、鎮魂はなお将来への責務として継承されてゆく。同世代の対抗艦といってよいミズーリは、1944年に就航した時点ですでに時代遅れの金食い虫だった。だが朝鮮戦争と越南戦争で大量の砲弾を「敵地」に降させた後、いったんは屑鉄となる日を待つ運命に陥りながら、辛くも解体を免れ、湾岸戦争で巨額の再整備を施されて再度戦場に投入された。半世紀近い履歴のすえ、文字通り無用の長物と成り果てた猛女Mighty Moは、1992年、ついに最終退役し、真珠湾に係留された。

この史上最後の戦艦の露天艦橋に立ち、その「栄光」の生涯を自らの人生に重ねる退役軍人たちの発言を反芻する。鶴見俊輔が筆者との雑談の際に、空母ミッドウェーに対して示した、押さえ難い嫌悪の表情も、ふいに記憶に蘇ってきた。真珠湾の海風に吹かれつつ、そこで抱いた正直な感興、それは記念すべき国家的記憶を担う宿命を託された、空疎で巨大な鋼鉄の棺に対する、感情移入とは無縁の、憐憫と哀悼の念とも言うべきものだった。

(2011年4月16-18日)

* 熱心な読者にはAAS-ICAS Joint Conference, Honolulu, Hawaiiのホームページ参照をお勧めしたい。
(<http://www.asian-studies.rtg/>) 800件近いセッションのすべての論文の英文要約が参照可能であり、以下の記事の参照番号と照合すれば、筆者の見解と論文要約との関係や異同もご理解頂けるはずである。